



樹皮の接合や補修に使用される松脂

つなぎ合わされた白樺の樹皮

骨組みとなる縦方向の板材と横方向の板材を並べる

進水式での試験操船

舟底を松明の火であぶって清める

白樺樹皮舟
(標本番号
H236600、
H236601)

棒で挟み込んで樹皮をとし合わせる。鱧も同じように成形する。白樺樹皮舟の姿は、樹皮が白い外皮を内側に丸まろうとする力と、弾力がある縦の横板の反発力とが釣り合って保たれていたのである。

白樺は常温では堅いが、熱すると柔らかくなり、成形しやすくなる。そのため、細かい細工をする部分にはお湯をかけた

り、火であぶったりして柔らかくする。収集された船の底には黒く焦げた部分が目立つが、それは樹皮を強く曲げようとして松明であぶった跡なのである。白樺の樹皮は縦方向にはとても強く、破れにくい

が、横方向には裂けやすいという欠点をもっている。製作過程で油断するとすぐに裂けてくる。製作者たちはそれに対処する方法も知っていた。小さな裂け目や、ちよつとした穴は松脂を溶かしたタールのよう

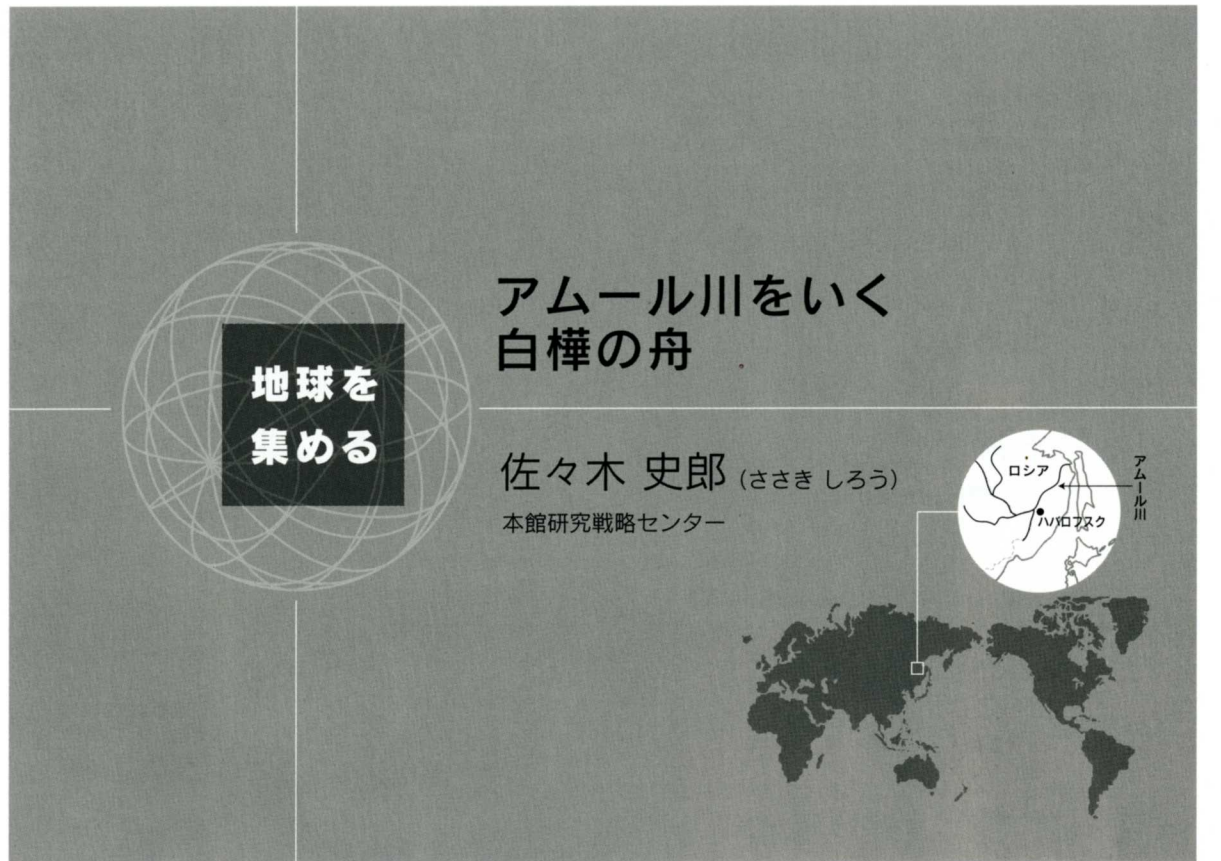
なものでふさいだり、つなげたりする。それでも対処できないような大きな裂

目や穴があいたときには、樹皮のアツブリケを作り、それを松脂ですきまがでないようにはりつける。松脂は防水性が高いために、あちこちの補修に使われる。

船はできあがると底を松明であぶって清め、進水する。進水では漏水する部分を確認する。そしてその部分を補修して完成である。

操船は一本のパドルで、カヌーのように漕ぐのが基本である。しかし、川面から獲物に静かに近づくときには、両手にもった二本の棒で川底を押し進め、やはり両手でへら状の櫂をもって音を立てないように進む。収集した舟は大型なので、もち運びは二人がかりだったが、積載量は一〇〇キログラムを超える。猟師が大型のヘラジカを積んでも沈まないようにできているのである。

この樹皮舟は補修をすれば何年も使える優れたものである。しかし、船先も船尾も尖っているために、船外機をつけることができなかった。また、船体が軽いために、船に重い船外機をつけるとバランスが崩れるのである。そのため、舟の動力化が進んだ一九六〇年代以降、急速にすたれていくことになった。



地球を
集める

アムール川をいく 白樺の舟

佐々木 史郎 (ささき しろう)

本館研究戦略センター

支流の人びとの舟

ナーナイは、ユーラシア大陸の北東部を西から東に貫いて流れる大河アムールの民である。アムール川は水産資源に恵まれているだけでなく、水運の大動脈でもある。この川は北東アジアの森や海の世界を中国の農耕世界やモングルの草原世界と結びつける働きをしてきたが、網の目のように広がる支流は、森の住民どうしを結ぶ重要な交通網であった。人びとは丸木や白樺の樹皮でできた小型のボートを使って支流奥深くに進出し、狩や漁に従事するとともに、各地の集落を訪ねて情報交換をしたりした。二〇〇五年の調査のときに本館に収集した白樺樹皮製のボートも、支流域で狩や漁に活躍した舟のひとつである。

在でも自分たちを本流の人びとと区別している。

白樺樹皮舟はアムール川流域の先住民に共通に見られる小型の舟だが、本流域の沿岸に暮らす人びとのあいだではあまり見かけない。これは支流域に暮らす人びとの舟である。軽く、細身のため、浅くて流れが速い支流でその特徴がいかせるのである。今回収集したものは長さが五メートル以上、幅は五〇センチメートル程度である。主要な材料である白樺樹皮は、幅が一メートル以上あったことから、直径が三〇センチメートルを超える大木からとられていた。近年では環境の悪化のためか、このような白樺の大木はめずらしいという。

樹皮と縦の反発力

その製作過程は驚きの連続だった。骨組みと樹皮を一体にして成形してしまうからである。すなわち、船の長さの分につなぎ合わせた樹皮の上に縦方向に堅い唐松の板材、横方向に柔軟な縦の板材を並べ、横方向の板を船の側舷に当たる部分で押さえた後、一気に丸めて、基本的な構造を作り上げてしまふのである。それから、船先をホツケーのスティックのようなかたちをした